

いま協同を拓く
2004 全国集会
in ながの

「協同集会 in ながの」を終えて

実行委員会
のまとめ

実行委員会事務局長 原山政幸（労協ながの）

はじめに

10月30日～31日にかけて行われた長野での協同集会は全体集会同約1200名、分科会約900名で2100名となり、過去最大規模で成功を納めることができました。

全国からはバス7台が結集し、一ヶ月前の〆切日を過ぎた時点で既にゲストも含めて500名の参加となり、県内では、117市町村すべてを回りきり、協同集会の意義や企画には賛同や強い関心が示され、300名近い一般市民の参加につながりました。特に、地元労協と高齢者生協のほか、長野県厚生連労働組合の結集は成功の大きな要因となりました。

この協同集会の素晴らしさは、何と云っても、人との出会いから、知り合い、結びつくことのおもしろさにあると、集会が開会したときから実感として感じています。自分でもこんな素晴らしい集会ができるとは、集会当日まで予想していませんでした。

日々奔走して献身的に準備してきたスタッフは、心の底で信頼し合える関係になりました。実行委員会で共に頑張ってきた多くの皆さんや、プレ企画でお互いに協力しあった皆さん、さらには、集会に共感していただいた長野県や各市町村の職員を始め、様々な団体の皆さんの積極的な呼びかけ・協力には本当に感激したり、かえってこちらの不十分さに申し訳なく思うようなことも多くありました。

集会が終わり、これでもう終わりかと思うと寂しさがこみ上げるほど、本当に幸せな体験を事務局でさせていただいたと思います。

まさに、この集会の成功の最大の要因は、人々の協同＝結び合い、集うことであったと思います。



“協同を問う92全国集会”のつながりが長野集会の開催決定に

長野での開催打診が日本労協連理事会よりあった際には、2回にわたり受け入れは困難としてきましたが、03年9月16日の長野県非営利・協同の懇談会において、92年の京都での「いま協同を問う92全国集会」で協同の素晴らしさを実感していた市川英彦先生（長野高齢協・副理事長、厚生連鹿教湯病院・名誉院長）が、協同集会を長野で開催できるのは願ってもないこと提起し、受け入れを決定づけました。

以来、2回の世話人会・2回の準備会を経て、03年12月9日に実行委員会を発足させ、6回の実行委員会、9回の役員会を開催しながら

団体会員 33 団体、個人会員 10 名で準備を進めてきました。

「長野県非営利・協同の懇談会」の基盤に NPO・まちづくり団体が参加

長野県厚生連労働組合や歌舞劇団田楽座、農文協など、労協ながのと長野県高齢者生協も含めて中心的な基盤をなしたのが、87 年より今日まで継続している「長野県非営利・協同の懇談会」におけるネットワークであり、協同集会を通じて、更に長野の非営利・協同のネットワークが全県に広げることが、この集会の一つの目標として位置付けられました。その呼びかけに、長野県 NPO センターをはじめとする NPO 法人や、大わらじ委員会などのまちづくり団体が加わり、協同集会の目的なども何度も論議しながら、テーマや企画の検討が進められました。特に、長野県らしさを追い求め、健康長寿、食と農、長野県政と住民自治などにこだわり、地元密着型の実行委員会に全国の力を結集してきたことにより、より質の高い集会に飛躍させることができました。

開催日変更などの困難も克服して

準備過程では、田中康夫長野県知事の参加に伴う開催日程の変更や、実行委員会に加盟していながら、積極的に参加目標を立てず構成員の自主参加に委ねる組織もあって、一ヶ月前でも県内の参加人数が予測できない状況もありました。何よりも準備のための任務を分担できる事務局スタッフが乏しく、それぞれ複数の任務を掛け持ちしながらとなったことから、主立ったメンバーによる集会事務局会議を頻繁に開催して計画を立てては実践し、最終版には協同総研の藤井由佳さんが連日長野に泊まり込み、小澤真さんがアルバイトと

して一ヶ月間かかわっていただき、なんとか乗り越えることができました。

プレ企画・地域懇談会の開催による準備過程を通じた協同の積み重ね

上山田大わらじ委員会による「協同の古代稲」のプレ企画提案と当日までに、田植え・講演会、稲刈り・はざかけ、大わらじづくり、わら細工講習会と、多彩な企画で集会へのご協力をいただき、最後は舞台での神輿へと、集会の一つの大きな柱として位置付けることができました。宮本委員長さんの一貫した集会への熱意と努力をはじめ、企画・調整にや訪問行動、分科会の報告者としてご活躍頂いた田島巖さんの献身的な協力・協同が成功の力ギとなりました。

また、東京高齢協と長野高齢協の連携による常楽寺の平和の読経と平和と文化の集いのプレ企画、創立 40 周年を迎えた歌舞劇団田楽座の長野公演への相互協力、飯伊地域や上伊那地域での事前の懇談会が開催できたことなど、新しい人と人の出会いから、つながりが広がり、これから地域で具体的な協同を模索する重要な取り組みとなりました。

住民が主体者になる大きな契機に

協同集会を長野で開催するにあたり、田中康夫長野県知事の参加を大きな目標としつつ、新しい公共、住民主体の自治を大きなテーマとして、全体集会と様々な分野での分科会が位置付けられました。実践的な取り組みを持ち寄って、自治体からの職員も自発的に参加しながら、住民一人ひとりが主体的にかかわっていくことが確信として持てる契機となり、元気の出る協同集会になりました。

多くの人が共感し、参加につながったのは、まさに「協同」が渴望されている(連合会・古

村事務局長)ことが象徴的であったと言えます。

オープニングにふさわしい長野の伝統と文化・自然の中で生きる人々の躍動

7年に一度の諏訪御柱大祭の年としてオープニングに位置付けた下諏訪町木遣保存会の皆さんによる木遣りと映像は臨場感・迫力満点で参加者にインパクトを与えました。

結衆大地の皆さんの獅子舞は楽しい雰囲気醸しだしました。

集会の準備段階からの一連の「協同の古代稲」のプレ企画の集大成となる上山田大わらじ委員会の神輿は、「協同」の象徴として中央に飾られました。

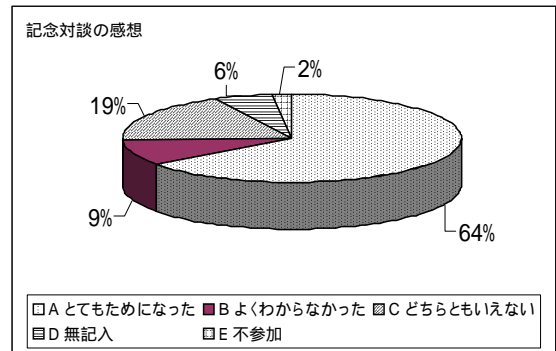
最後の木遣りによる締めは、会場の参加者も巻き込み、一体感あるオープニングを飾ることができました。

「コモンズ」「ディーセントワーク」をキーワードに

田中康夫長野県知事の企画への参加とILO堀内光子駐日代表との対談の実現や寺島実郎氏の基調講演、さらには移動分科会による「脱ダム宣言」の検証や、松代大本営地下壕の視察など、「人らしく生き、暮らし、働くために」をテーマとして、時代の焦点を集会の企画に盛り込み、全国の先進的な実践者と県内の魅力溢れる報告者を擁して、充実した集会を行うことができました。

「コモンズ」「ディーセントワーク」をキーワードとして対談が繰り広げられた記念対談は、コーディネーターの菅野副実行委員長が適宜テーマを投げかけ、お二人のやりとりもあって、田中県政とILOが目指す理念などが理解できました。ILO堀内代表は「協同」

あるいは「協同組合」を重点として論議されたことから、知事の「隣人愛」の思想が「協同」と重なるとともに、住民が主体者となっていく地方自治の時代の到来を告げる記念対談となりました。

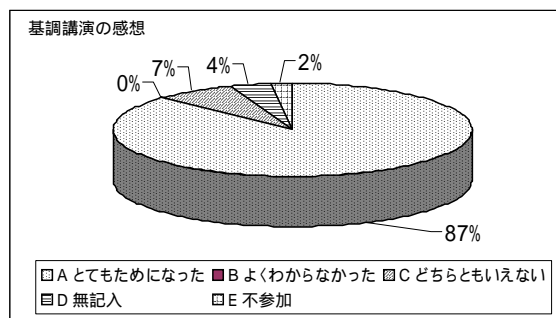


世界潮流を正しく見極め、“不条理への怒り”を持ったたくましい「協同」を

時代潮流の中で、人間らしく生き、働き、暮らすためには時代の不条理に対する正確な認識を持ち、その不条理に対する怒りをもって、単に連帯しようという「お人好しの協同」でなく「たくましい協同」を、と激励も込めて基調講演が行われました。

中国を中心に世界経済が大きく変化する中で、市場主義や「Me - イズム」に対抗する領域が求められるとし、官と民の間の「公」を支える一つの仕組みとして、協同への期待を述べられました。

アンケートや様々な感想から、「わかりやすかった」「世界潮流を知ることの大切さが理解



できた」等の高い評価が寄せられており、今後に活かせる講演となりました。

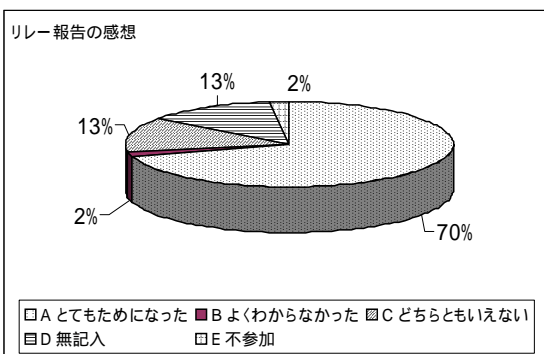
人柄を感じる実践的なりレー報告

「食農教育」「保健・医療・福祉・」「新しい公共と仕事おこし」のテーマで報告があり、各20分という枠の中で、要点をまとめた報告がありました。

木内飯山市長の食育による人づくりの報告には「そんな地域で子育てができればすばらしい」など、評価の声がありました。

佐久総合病院の西垣健康管理部長の報告は、時間へのご配慮から約15分の報告となり、歴史ある実践報告を行うには難しかったため、「もう少し具体的な話が聞きたかった」「時間が短いのではないか」との感想が寄せられました。

労協センター事業団の田中副理事長の報告については、労協関係者からの共感を示す感想はあったものの、一般的には指定管理者制度や仕事を自分たちでつくるとい話には反応が余りありませんでした。しかし、今、自治体を取り巻く大きな変化は伝わる内容で、危機感と住民自治の必要性を提起した大事な報告になりました。



長野らしさが評価された「信州・食のおもてなし館（交流会）」

三水村のタペストリーで会場の雰囲気盛り上げ、「そば打ち名人」による実演や、きのこ汁の提供などの企画もあり、メニューも長野県らしさが活かされて、量的にも充分であったことから、最高の「おもてなし」が実現できました。

参加者からは、長野らしさが伝わって良かったとの感想が寄せられています。

当初は450名を越え、大混雑が予想されましたが、雨であったことや、全体集会在長時間に及んだためか、受付数は約400人に留まりました。

また、公的施設で飲酒や自前の料理で交流会ができる500名以上の会場が確保できない中で、長野市民会館館長さんのご理解とご協力により行うことができました。

時代の焦点となるテーマを設定し「贅沢」な報告者による熱気溢れる分科会

会場がどこも満員となり、時代の焦点となるテーマ（介護保険の見直し、健康長寿、食と農、新しい公共、子育てと若者の仕事、協同組合と労働組合の未来、平和など）を設定し、人らしく生き、暮らし、働くためにいかに協同するかを深め、参加者の生き方や活動に大きな活力を与えることができました。

特に、ご報告者には、全国で活躍する方々をお招きすることができ、県内のご報告者も地域で注目されている特徴をもった方々に登場いただくことができ、一つひとつの集会在ミニ集会と言えるほどの質の高い分科会となり、その分、時間が不足するほどの熱のこもった報告や討論が行われました。

アンケート結果でも、各分科会でそれぞれ

に「特に良かった報告者・講師」がおり、その分科会の評価につながっているのが特徴です。

全体的には、「具体的な実践報告が聞けてよかった」との感想が多く、それぞれの事業や活動、今後の人生におおいに役だったり、活力になるとの感想が寄せられました。

“協同の心”で「新潟県中越地震義援金」に協力

最初に地震が発生した10月23日は、開催日直前の事務局会議が終了した直後でした。日が経つにつれて甚大な被害が明らかになり、急遽、義援金を募ろうと、前日に募金箱や分科会用の募金袋を準備し、協同の一つの形として参加者に呼びかけました。

全体集会では132,555円、分科会では117,720円、合計250,275円が寄せられ、11月16日に長野県に納めました。義援金は新潟県の被災者が必要としている物資を県が責任をもって直接職員が手渡すことになっております。

11月25日には田中康夫長野県知事より集会に参加し、ご支援いただいた皆様に御礼の電話がありましたことをご報告致します。

おわりに

長野での協同集会開催の提起がされてから足かけ1年4ヶ月という期間でしたが、終わってみれば、もっと時間があれば、もっと努力していればという想いがつづります。

特に、全体集会の参加者があと一步のところであったことは、非常に悔いが残るところではあります。

しかし、集会自体の内容の高みや、一人ひとりのスタッフの限界を超えようとする頑張りによって得られた集会の成功は、歴史と心

に残る大きな財産として輝きつづけ、新たな広がりへの活力となることは間違いありません。

今集会で長野に半住民化して大活躍した協同総研の藤井由佳さんや、失業していた中で集会に携わり、今はセンター事業団で働く小澤真さん、そして駐車場係の責任者として見事に責任を負いきった労協の若き担い手である戸谷和貴さんなど、これからの協同を担っていく20代の若者達が、自らの努力で成功につなげ、自信と誇りを持ち、自己の可能性を切り開いていったことは、この集会の影にある大きな成果であったと思います。

長い間「協同」を追求し、実践してこられた世代の皆さんと、物怖じせずに斬新で伸び伸びとした活力を持った若き世代が力を合わせて集会を成功させたことで、「夢とロマン」が新しい世代に受け継がれた、そんな節目の集会になったように思います。

全体集会の参加者の不足を質がカバーする状況の中で、中心的に取り組んだスタッフからは「不完全燃焼」の集会として、わだかまりが残っていることも事実です。その想いを燃やし続け、エネルギーにして、これから長野県での協同を広げ、仕事おこしやまちづくり、住民と行政との協働の具体化などを勝ち取っていくことが、長野県での全国協同集会が本当に良かったと言える事につながります。そのために、この集会で得られたものをさらに活かすよう必死で頑張りたいと思います。

最後に、様々な形でご協力いただきました皆様、集会に参加し、ともに集会を成功に導いていただいた皆様、本当にたくさんの協同の心を頂き、ありがとうございました。



お礼と報告

皆様へ

拝啓 深秋の候 益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたびは、いま「協同」を拓く2004全国集会 in ながの開催にあたり、格別のご支援を賜り、誠にありがとうございました。

お陰様をもちまして、全体集会は約1200名、分科会は約900名の参加者をお迎えし、10回目の全国協同集会にふさわしい2100名の集会として成功裡に終了することができました。

昨年9月16日に「長野県非営利協同の懇談会」において長野での開催受入れを確認し、世話人会や準備会を経て12月5日に実行委員会を発足させて準備を重ねて参りましたが、大成功を納めることができ、これまでご協力いただいた皆様や、当日ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げる次第でございます。

今回の協同集会は、都道府県の首長が初めて集会の一つの企画に参画するとともに、全自治体を訪問して協力を要請し、ほぼ県内全市からの後援を取り付けたこともあって、県や市町村の職員・議員さんが大勢参加し、公共を市民と行政が協同で担う新しい時代を象徴する集会となりました。

基調講演では、世界潮流における日本の進路を踏まえ、NPOや公のあるべき方向性を寺島実郎氏がお話しされ多くの示唆と勇気を与えていただきました。

リレー報告では、木内飯山市長による食農教育と地域づくりの実践や、佐久総合病院における住民との協同による健康づくり、そして労働者協同組合における仕事おこしのご報告があり、農業県、健康長寿県・長野の典型例と先進的な協同による仕事おこしのご報告をお聞きすることができました。

さらに、オープニングアクトにおける下諏訪町の御柱祭木遣り唄、伊那のまつり創造集団結衆大地の獅子舞、プレ企画「協同の古代稲」を通じて共に集会をつくりあげてきた上山田大わらじ委員会の大わらじ神輿など、自然との共生をはかりながら伝統と文化を伝承されてきた皆様が舞台上で活躍し、「信州・食のおもてなし館」では「笹ずし」「おやき」など信州の代表的な食文化と伝統を参加された皆様にご堪能いただくことができ、長野らしい協同集会として地域の特色を盛り込んだ多彩な企画により、ご参加いただいた皆様に大変喜んでいただくことができました。

各分科会においては、会場がどこも満杯となり、協同組合、NPO法人、まちづくり団体、労働組合などの幅広い団体からの実践報告に基づいて「協同」することがいかに重要であるかを熱く語り合い、短い時間の中でも質的にも高い協同集会として評価される分科会になりました。

また、集会期間中を通じて呼びかけました「新潟県中越地震義援金」は、全体で250,275円となり、皆様の善意を現地の被災者にお届けするよう、長野県地震災害対策本部に納めました。

準備の過程では連絡不足などもあり、また集会当日も配慮にかけることが多々あったかと存じますが、至らなかつた点につきましてはお詫び申し上げ、ご容赦願えれば幸いです。

さて、集会は終了となりましたが、集会を通じて得た多くの出逢いや結びつきを今後活かしていくことが、本当の成功であると私たちは考えております。このつながりを活かして「協同」が息づく地域づくり・仕事おこしを更に進めて参りたいと考えておりますので、皆様方の変わらぬご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

本来ならば拝眉の上、御礼申し上げますところですが、略儀ながら書中をもちましてご報告と御礼のご挨拶とさせていただきます。

末筆ではございますが、季節柄、皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

敬具

平成16年11月 吉日

いま「協同」を拓く2004全国集会 in ながの
実行委員長 松島松翠